

デカルト哲学の形成

——その一、デカルトとベークマン——

はじめに

現代は渾沌の世紀である。「近代の終末」、「近代の超克」が叫ばれてからすでに久しい。現代の思想的混乱の底には、「近代合理主義」の行きづまりに対する現代人の不安に満ちた苛立ちがある。現代の混沌とは、あるひとつの時代の「黄昏」であるのか、それとも「夜明け」に近いのか、いずれにしても予感の時代を意味している。それは、次の時代を模索している状態であり、われわれは、歴史の転換期に生きている。

かつて、ギリシアにおけるポリスの崩壊期、古代ローマ帝国の衰亡期、さらに、ルネサンス、宗教改革の時代など、歴史がその大きなうねりを見せたことがあった。そこには、多くの混乱——それまでの価値観の動揺、解体と、その時代の思想的課題を身をもって生き、それに答えて時代をきりひらいたすぐれた思想家たちが存在した。

ところで、中世から近代への激動のなかで試みられた多くの努力のうちで、「ただひとり闇のなかを歩むように」⁽¹⁾

原田 佳彦

その思想的課題に答えたのがデカルトその人であった。

デカルトのコギトによって初めて、近代の自由な主体的個人の原理が確立し、さらに、これを基礎にした新たな原理によって、自然の全現象が統一的に説明されることになる。自然は、質的な自然から量に還元された機械論的な自然となり、こうして、アニミスティクな目的論的自然観から機械論的自然観への決定的な転換が遂げられたのである。

中世から近代への転換期に生き、近代合理主義哲学の礎を置いたデカルトの思想形成を探る作業は、「デカルトの思考が中世にその源泉を求めている」⁽²⁾がゆえに、いっそう、現代に生きるわれわれにとって示唆を得るところが大であるように思われる。

本稿は、学窓を巣立った若きデカルトの思想形成に焦点を合わせ、とりわけ、デカルトに大きな影響を与えた三人の人物——ベークマン、メルセンヌ、ベリユル——とデカルトとのかかわりに主眼点を置いて、デカルト哲学の背景を探るひとつの試みである。

これら三人の人物は、いずれもデカルトと時代を共にし、直接デカルトと親しく交わった、デカルトの師とも友とも呼ぶべき人たちであり、しかも、当時の思想的、社会的潮流のなかで、それぞれ典型的な生き方を示した人たちである。

すなわち、ベークマンは機械論的自然観の形成期にあつて最もすぐれた科学者の一人であり、メルセンヌはいわゆるメルセンヌ・アカデミーの主宰者で、のちにヨーロッパ諸国に次々と誕生する科学アカデミーの原型をつくり、オランダに隠れ住んだデカルトと各地の哲学者たちとを、ときには強引に結びつけた人物である。そして、ベリユルはフランスのオラトワール会を創立し、トミスムよりもアウグスティヌス説を採り、ジャンセニスムの指導者サン・シランにも影響を与えた、⁽³⁾ 宗教界の有力者である。

以下、章を改めて、デカルトとこれら三人の人物とのかかわりを軸に、デカルト哲学の形成の途をたどってみたい。

(今回は、紙数の関係で、ベークマンのみをとりあげ、メルセンヌ、ペリュルについては次号以下で考察を進めることにする。)

註

- (1) Descartes, *Discours de la Méthode*, 2^e part., A.T. t. VI, p. 16.
- (2) André Robinet, *La philosophie française*, 1966, p. 59.
- (3) Louis Cognet, *Le jansénisme*, 1961, p. 22~27.

一 デカルトとベークマン

——一六一八〜一六一九年——

九年間にわたり、ラ・フレッシュ La Flèche の学院 Collège Henri IV で教育を受け、さらに、ポアティエ Poitiers の大学で、おそらく、法学と医学を学んだ⁽¹⁾デカルトは、「書物による学問によって、人生に有用なあらゆることからの、明白で確実な知識をえられる⁽²⁾」という確信を裏切られ、「勉学にはげんだことによって、ますます、自分の無知を発見したという以外には、なんらの効果もえられなかった」⁽³⁾ことを見出したのである。ここにいたっ

て、デカルトは断然書物を捨てることを決意する。

わたしは、教師の監督から解放される年齢に達するとすぐに、書物による学問をまったく捨て去ってしまった。そして、自分自身のなかに見出されることができる学問、あるいはまた、世間という大きな書物のなかに見出されるかもしれない学問のほかには、もはや、いかなる学問も求めまいと心に決めて、わたしの青春時代の残りを、旅をすることに用いて、そこかしこの宮廷や軍隊を見て歩き、さまざまな性格や身分の人たちと交わり、いろいろな経験を積んで、運命が自分に与える機会を捉えて、自分を鍛錬し、いたるところで、わたしの前に現われてくるさまざまなことさらにについて反省を加え、そこからなんらかの利益を引き出そうと努めたのである。⁽⁴⁾

デカルトが法律学の学位を受けたのは、一六一六年、二〇歳の時であった。⁽⁵⁾これ以降、一六五〇年二月十一日、「水が凍るのと同じように、思想も凍てつく」⁽⁶⁾スウェーデンでの客死にいたるまで、デカルトは「方法的放浪」⁽⁷⁾ *vagabondage méthodique* のなかで生きることになる。学院を出てからバリにその姿を現わしたデカルトは、ミドルジユ Claude Mydorge、メルセンヌ Marin Mersenne, 1588-1647 らと親交を結び、哲学、数学、音楽などにとりこんでいたようである。⁽⁸⁾

そして、翌一六一八年、オランダの地に、ナッサウ伯マウリッツ Mauritz von Nassau, Maurice de Nassau, 1567-1625 麾下の新教軍の志願将校として、デカルトは再びわれわれの前にその姿を現わすのである。

デカルトは、オランダのブレダ Breda に十五ヶ月間滞在している。⁽⁹⁾この時、デカルトはその生涯を決定する第一の体験⁽¹⁰⁾をしたのである。それは、デカルトの思想形成のうえで深い影響を受けた、殆んど唯一の師であり、友人

でもあったイサーク・ベークマン Issac Beekman, 1588-1637 との邂逅である。ベークマンは、のちにユトレヒト大学の総長になった、当時の最もすぐれた学者の一人で、デカルト、ガッサンディ Pierre Gassendi, 1592-1655、ロベルヴァル Gilles P. de Roberval, 1602-1675、そしてパスカル Blaise Pascal, 1623-1662 などとともに、機械論的自然観の形成、発展に大きな寄与をした科学者である。¹¹¹

デカルトは、その「精神の歴史」¹¹²である『方法序説』*Discours de la Méthode*, 1637 のなかでは、ベークマンについて一言もふれることがない。のちのベークマンとの不和、また、デカルトが『方法序説』執筆の際、もはや自分分はベークマンを越えた、と考えていたこともあるだろうが、いささか不可解な態度であるといわなければならぬ。もともと、『方法序説』には、ディアーナやミネルヴァはともかく、具体的な人物の名前は、アリストテレスを除いて、誰の名も挙げられてはいないのだが。¹¹³

しかし、デカルトがのちにどのように考えたにせよ、デカルトがベークマンからいかに深い影響を受けたかということは、ベークマンに宛てたデカルト自身の手紙から、明らかである。

実際、貴殿「ベークマン」だけが、わたしを無為から引き出して下さり、わたしが以前に学んだこと、そして、今となつては殆んど記憶から薄れてしまったことを想い出させて下さったのです。まじめな仕事から遠くさまよい出ていたわたしの精神を正しい道に連れ戻して下さったのは、貴殿だけなのです。ですから、わたしの頭脳から誤りではないと思われるものがなにか出てくるとすれば、貴殿はそれを貴殿自身のものであると要求なさる権利をおもちになつていらっしゃるのです。¹¹⁴

こうして、デカルトは、その処女作『音楽提要』*Compendium musicae*, 1619 を、一六一九年の新年の贈り物と

してベークマンに捧げている。

これらはすべて、無知な軍人たちのあいだで、自分の考えていることは全くかけ離れた生活を送っている閑な人間によって、貴殿一人だけのために、急いで書き上げられたものなのです。⁴⁴

デカルトがベークマンと初めて出会ったのは、一六一八年十一月十日、ブレダの街角でのことであった。ブレダの街頭にフランドル語で書かれた数学の問題が掲示されているのに目をとめたデカルトが、偶然そのそばを通りかかったベークマンにこの問題をラテン語に訳してもらい、たちどころにその数学の問題を解いて、ベークマンを驚かせた、といういささかできすぎた話が伝えられている。⁴⁵ おそらく、そういうことは実際には起こらなかったであろうが、ただ、デカルトとベークマンが数学を通じて知り合ったことは事実であろう。⁴⁶

ラ・フレッシュの学院で、「その推理の確実性と明証性のゆえに、とりわけ数学が気に入っていた」⁴⁷ デカルトは、それにもかかわらず、「当時はまだ、その本当の用途をさとしていなかった。そして、それが機械的技術のみに役立てられていることを考えて、その基礎がこのようにすっかり動かないものであるにもかかわらず、いままですの上にもっと高い建物をだれも築かなかったことを不思議に思っていた」⁴⁸ のである。

ここでの「機械的技術」arts mécaniques とは、具体的には築城術のようなものを指すらしいが、⁴⁹ より確実で普遍的な学問の基礎を求めているデカルトには、もちろん満足のできるものではなかった。普遍的な学問の基礎は、ベークマンとの邂逅によって初めて得られたのである。すなわち、「物理－数学」Physico-mathématique ≡ 数学を自然学の研究一般に適用することである。

ベークマンと出会う以前、デカルトの主たる関心は個々の科学技術の応用という面に向けられていた。デカルトが

所屬していたモーリス・ド・ナッソーの軍隊は、流体力学の原理や十進小数記数法の基礎を築いたシモン・ステヴィヌス Simon Stevinus, 1548-1620 をはじめ、その方面の学者が数多く招かれ研究に従事していた。モーリス・ド・ナッソーは、「二プラス二は四である」ということを自己の信条としたほどの合理主義思想の持主で、数学や自然科学に力をそそいだ「軍人・科学者」guerrier-savantであり、その軍隊は一種の「軍事アカデミー」académie militaire の観を呈していた。²¹⁾

デカルトは、直接モーリス・ド・ナッソーから刺戟を受けるということとはなかったようであるが、その「軍事アカデミー」の雰囲気の中で、多くの科学者と交際していた。そして、デカルトがその関心を理論的方面へ向けるきっかけとなったのが、ベークマンとの出会いである。この間の事情は、ベークマンの日記から窺うことができる。

このポアトゥ人「デカルト」は、多くのジェズイットやその他の学者、科学者たち、との交友関係をもっている。……しかし、彼がわたしに打ち明けて話してくれたところによると、彼はこれまでその研究において数学と物理学を緊密に結合した人とは出会わなかった、ということである。わたしはそれを聞いて愉快に思った。わたしのほうでも、この種の研究については彼以外の誰にも話したことはない。²²⁾

こうして、デカルトはベークマンの影響のもとに研究を始める。すなわち、「真空中における石の落下」、「弦の振動とその法則における音階の比例的調和」、「四つの数学上の証明（角の三等分の問題と、三種の三次方程式に関する論証）」などである。

ベークマンは、当時すでに、アリストテレスの自然学からの脱却をなしとげており、「真空」に対する恐れ（嫌悪）の原因が大気圧と関係があることを早くから見抜いていた。²³⁾ また、デカルトによれば、「ひとたび真空中で動かさ

れたものは常に運動する、と彼「ベークマン」は考えていた。²⁴さらに、ベークマンは人間が乗れるある種の飛行物体の構想をも抱いていたらしい。²⁵デカルトが、人間の「身体とは、神が土からつくった彫像、あるいは、機械以外の何物でもない」²⁶と考え、動物機械論を主張するにいたった最初のきっかけはベークマンから得たものである。

しかし、デカルトの思想形成のうえで、ひとつの重要な転機をもたらしたベークマンの影響とは、ベークマンの個々の数学的物理学の成果ではなかった。そうではなくて、ベークマンの学問を貫いている、自然の普遍的研究方法²⁷自然の「法則化」の傾向であった。

デカルトは、確かに、ベークマンに会う以前から、数学を基礎にして、「そのうえにもっと高い建物」²⁸を建てようとしていたのであるから、この方面でデカルトに及ぼしたベークマンの影響力を余りに過大視することはできないかもしれない。しかし、それでもやはり、「自然を愛することではなく、自然を征服すること」²⁹によって、人類全体の幸福に貢献することを考えていたデカルトに、「自然の支配者、かつ所有者」³⁰たらんとするきっかけを与えたのは、ベークマンその人の普遍的な自然の捉え方において他にはなかった。したがって、「ベークマンとの交際は、単に「学問の」素人 amateur にすぎなかったデカルトを「新しい学問の」創始者 auteur に変えた」³¹ということができるであろう。

ベークマンは、ステヴィヌスの静力学から示唆を得て、流体がその容器に及ぼす圧力とその重さは流体と容器の底面積に関係があること、真空中では運動体は決して静止しないが、大気中ではその運動体に絶えずぶつかる空気が運動体の運動をさまたげるので永久運動は不可能であること、物質は原子から構成されており、微細な物質は常に運動していること、そして、静止している物体に運動している他の物体が触れた場合、両者が相等しい物体であれば、両者は運動していた物体の半分の速さで運動することなど、³²いまだ明確な表現をとっていないとはいえ、慣性の法

則、衝突の法則を含んだ自然理論をデカルトに伝えたとともに、いくつかの問題をデカルトに提出した。⁸⁸ デカルトは、その数学的素養を駆使して数学的自然学の研究を進め、ベークマンに対して「力学」と「幾何学」の本を書くことを約束している。

もし、わたしがどこかに滞在することがあれば、わたしはそれを望んでいるのですが、わたしの「力学」、あるいは、「幾何学」を消化することですぐとりかかえることを貴殿（ベークマン）にお約束致します。そして、わたしは、わたしの研究の促進者として、また、その第一の創始者として、貴殿にご挨拶することになりました。⁸⁹

これは、『物理・数学』*Physico-mathematica*, 1618 として実現されるが、のちに『方法序説』とともに公刊された『幾何学』*La géométrie*, 1637 においては、もはやベークマンの名前は出てこない。一六三〇年には、ベークマンに宛てた手紙のなかで、デカルトは、「貴殿（ベークマン）の数学的自然学の空想は、*Batrachomyomachie*（ホメロスの詩）の物語以上には、わたしに多くを教えることはありませんでした」⁹⁰と、「まことに忘恩の言辭ともいふべき」⁹¹ことを書き送っているが、デカルトがベークマンといわば共同研究をしているうちに、ベークマンを越える学問の構想をもちはじめたこともまた事実なのである。

わたしの仕事の対象を貴殿（ベークマン）にかくさずに申し上げますが、……わたしは、連続量であると非連続量であるを問わず、どのような種類の量であろうと、提出されるあらゆる問題を、それぞれの本性に従って、一般的に解くことができるような、全く新たな学問 *scientiam penitus novam* を公表したい、と考えております。⁹²

これは、単に数学の革新＝解析幾何学としての普遍数学 *mathesis universalis* をさすだけではなく、より広くデカルトの「方法」そのものの萌芽とみることができる。

ベークマンは、デカルトに対して、新しい自然学＝数学的自然学の構想を語り、数学、力学の著作をデカルトに期待したにとどまったのであるが、デカルトは、「数学という共通の名によって指示される個々の学問のすべてを学ぼう」と考えていたのではなく、人間の学としての哲学、形而上学をも含めた、「不治の病のような、人間の知りた」という欲望⁸⁸を満足させる、あらゆる「真理」*vérité*の基本的な原理をめざしていたのである。

モラルと学問との統一を意図していたデカルトは、ただ、学問の原理、すなわち、普遍数学の構想に到達しただけでは満足できなかった。デカルトは、単なる科学者^{ヤツァン}ではなく、智慧の探究者＝哲学者であったがゆえに、ベークマンから新しい数学的自然学形成への示唆を受けると、ただちに、ベークマンを越えることができたのである。

これは、無限の仕事でありまして、到底、ひとりの人間のよくなしうるところではありません。それはまた、考えられないほどの野心に満ちた仕事なのです。わたしは、この学問の混沌たる状態のなかに、なにかしら光がさしているのを認めました。わたしは、その光によって、最も厚い暗黒をも払いのけることができる、と信じております。⁸⁹

ベークマンは、哲学者^{フィ}デカルトを理解することができなかった。ベークマンから学び得るもの——数学の自然への適用、を基本的には学び尽したデカルトは、もはやブレダにとどまてはいない。デカルトは、ベークマンへの感謝の手紙のなかに、「わたしは、この一ヶ月以来、もはや勉強をしておりませんが、それはおそらく、わたしの精神が、わたしが進んで求めようと決意していることを探究することに耐えないほど、さまざまな発見によって、消耗し尽さ

れたからでありましょう」⁴⁰ということばを残して、ブレダをあとにする。

書斎の学者ではなかったデカルトは、「単なる人間としての人間の仕事のなかで、まちがいに善なるもので、有益なもの」⁴¹を求めた「智慧」*sagesse*の探究者であった。自然学の研究によって、確実で明証的な普遍学の基礎を築いたデカルトは、「自己自身の内においてもまた学ぼうと決意し」⁴²旅立った。

わたしは、自分の行動において明らかに、確信をもってこの世を歩むために、真なるものを偽なるものから分かつ全てを学びたい、という極度の熱意を常にもち続けた。⁴³

* * *

こうして、ベークマンと別れたデカルトはその「方法」を模索し、形成すべく、ヨーロッパ各地を遍歴し、生涯、安住の地を定めることがない。そこには、なにかただならぬものがあり、デカルトが「瀆神の不安」⁴⁴に悩まされたふしもある。

「近代合理主義者」デカルトの明晰な思想の背後になにがあったのだろうか。

明晰化されたものの背後に、不分明な暗い多くのものがあり、それとの緊張関係のうちに明晰な論理と表現が成り立っていること、そしてさらに、明晰な論理と表現とはなにかを表わすだけでなく覆い隠す働きもあるということがある。⁴⁵

孤独のうちに、各地に隠れ棲んだデカルトは、しかしながら、もちろん、同時代の思想界、宗教界と無縁であったわけではない。それどころか、実に夥しい書簡が残されていることからわかるように、デカルトの交友は広い。こ

注

- (1) シュピナー (シュピナー等) の教授は、フーシェ教授に、教授の教授は行われていなかった。cf. Charles Adam, *Vie de Descartes*: A-T. t. xII, p. 39.
- (2) (3) *Discours de la méthode*, 1^{re} part., A-T. t. VI, p. 4.
- (4) *ibid.*, A-T. t. VI, p. 9.
- (5) Ch. Adam, *op. cit.*, A-T. t. XII, p. 35.
- (6) lettre de Descartes à Bregy, 15 janvier 1650, A-T. t. V, p. 467.
- (7) Samuel S. de Sacy, *Descartes par lui-même*, 1956, p. 21. 三和弦、トク、ーン。
- (8) Cf. Ch. Adam, *op. cit.*, A-T. t. XII, p. 35-44, Adrien Baillet, *La vie de monsieur Des-Cartes*, 1691, t. I, p. 31-39.
- (9) Cf. A-T. t. X, p. 646.
- (10) 第二の巻は、フランスの歴史家の「歴史」の、一六一九年十一月十日の「歴史」の、
標題「歴史」である。 Cf. Descartes, *Olympica*, A-T. t. X, p. 179 sq., A. Baillet, *op. cit.*, p. 50 sq.
- (11) Robert Lenoble, *Mersenne ou naissance du mécanisme*, 1943, p. 336.
- (12) lettre de Balzac à Descartes, 30 mars 1628, A-T. t. I, p. 570-571.
- (13) 他、ルネの「ルネの術」の、
lettre de Descartes à Beeckman, 23 avril 1619, A-T. t. X, p. 162-163.
- (14) *Compendium Musicae*, A-T. t. X, p. 141.
- (15) A. Baillet, *op. cit.*, t. I, p. 42-44.

- (1) Cf. Journal de Beekman, A-T. t. X, p. 46-51.
- (2) *Discours*, 1^{re} part., A-T. t. VI, p. 7.
- (3) *ibid.*, A-T. t. VI, p. 7-8.
- (4) Etienne Gilson, *Commentaire*, 2^e éd., 1926, p. 129.
- (5) Gustave Cohen, *Les écrivains français en Hollande dans la première moitié du XVII^e siècle*, 1920, p. 371-391.
- (6) Journal de Beekman, A-T. t. X, p. 52.
- (7) R. Lenoble, *op. cit.*, p. 427.
- (8) Descartes, *Cogitationes Priores*, A-T. t. X, p. 219.
- (9) A-T. t. X, p. 51.
- (10) Descartes, *Traité de l'homme*, A-T. t. XI, p. 122.
- (11) *Discours*, 1^{re} part., A-T. t. VI, p. 7.
- (12) Ferdinand Alquié, *Descartes, L'homme et l'œuvre*, 1956, p. 46.
- (13) *Discours*, 6^e part., A-T. t. VI, p. 61.
- (14) Henri Gouhier, *Les premières pensées de Descartes*, 1958, p. 20 sq.
- (15) ヴェーケンンの自然学上の個々の業績について 近藤洋一『デカルトの自然像』一九五九年、九三ページ以下、参照。
- (16) Gaston Milhaud, *Descartes savant*, 1921, p. 36.
- (17) lettre à Beekman, 23 avril 1619, A-T. t. X, p. 162-163.
- (18) lettre à Beekman, 17 octobre 1630, A-T. t. I, p. 164.
- (19) 邦題「複製帳」——「図々」。
- (20) lettre à Beekman, 26 mars 1619, A-T. t. X, p. 156-157.
- (21) *Discours*, 2^e part., A-T. t. VI, p. 19.

- (38) Descartes, *La recherche de la vérité*, A-T. t. X, p. 499.
- (39) lettre à Beeckman, 26 mars 1619, A-T. t. X, p. 156-157.
- (40) lettre à Beeckman, 23 avril 1619, A-T. t. X, p. 162-163.
- (41) *Discours*, 1^{re} part., A-T. t. VI, p. 3.
- (42) • 39 *ibid.*, A-T. t. VI, p. 10.
- (44) Henri LeFebvre, *Descartes*, 1947, p. 97.
- (45) 中村雄二郎「デカルトと現代」(河出版・世界の大思想・第七巻『デカルト』月報)一九六五年。